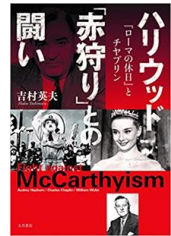


書評

吉村英夫著 大月書店

ハリウッド「赤狩り」との闘い



堀川慶治 スタッフ

三重県が誇る映画評論家吉村英夫氏の最新刊が発売された。自らこれまでの最高傑作と自負されている渾身の力作である。正に今の時代を生きた映画ファンの文化人として、活字にして書き残したい全てを網羅しようとの意気込みがヒシヒシと伝わってきた。そして、何とその中に、吾小冊子「シネマ游人」に触れられている箇所があるのです（感激！）。そこに「究極の娯楽作品が、最高の芸術に昇華するという黒澤明の信条に私の基準はある」と書かれていて、私の物差し（面白いものこそ映画だ）と同じ、と意を強くしたものです。新聞で時折目にした映画評に共感していた理由がわかりました。

5章からなるこの本の第1章は「チャップリンと『ローマの休日』」。この中で、スペイン階段でヘプバーンがジェラートを食べる3分強のシーンが、何と2日ばかりで撮影されたことを、後ろに映っている教会の時計の針から解き明かしている（何という執念）。映画への愛が滲み出た豊富な知識と蘊蓄うんちくにまずは感心しな

がら、先が楽しみになる滑り出します。

第2章は、チャップリン映画、とそれが撮られた時代背景等々。すべて観たことのある映画の話なので、スラスラと読み進み、《チャップリンの追放》と《ローマの休日》のオールイタリア制作《の関係が解き明かされ、なるほどと感心しながら読み進む。

ここまで読んで気付いたのだが、私と吉村氏とは丁度10歳違い。氏は60年安保の1年前に早大に進学し、ほんの1年余りで60年安保を迎え、反安保闘争の挫折を経験された。自由の学園・津高校の後輩である私は、70年安保の1年前に横国大に入学し、全共闘運動を嚙った段階で、生煮えの思いをした。リベラルアーツリベラルアーツ⇨使える知識と技⇨教養主義の全盛時代、乱読と映画三昧の日々を送り、郷里へ戻り公務員として就職したという共通性からの共感である。先輩から「キリスト教とイスラム教は金を貸して利息を取ることを禁止している事も知らないで『ベニスの商人』を観たって、欧米人の感覚は解らないぞ」とか、「日本人が暮らしている世間と、独立した個人からなる欧米社会との違いが解るか、ちゃんと教養を身につけないと欧米映画や書物は理解できないぞ」と言われた日々を共に送った（想像ですが）吉村氏への共感が深まる思いが沸いた。

第3章に入ると、初見の人名・映画名（しかも・全てカタカナ）の連続に：…つくづく知識の不足（勿論、全て吉村氏が吟味され厳選された書き残すべきものなのだから）を思い知らされた。第4

章からはいつもの吉村節に戻り、面白く読む進むことができた。

甘く切ないラブロマンスの傑作としか感じていなかった『ローマの休日』の核心が記者とカメラマンの友情にあったとは。当時の日本の大卒上級職国家公務員の20年分の賞金をファイにした新聞記者。それに匹敵する賞金を諦め、友情を選択したカメラマン。ハリウッドを吹き荒れていた「赤狩り」と、仲間を売ることが仕事を安堵する米当局への強烈な反撃の作品であったことが理解できた。

吉村氏は本書執筆の動機として、安倍政権が秘密保護法、集団的自衛権行使容認、安保法制、そして「共謀罪」の制定から憲法9条の改悪へと向かおうとしている日本の現状への危機感から、出版を急いだと述べている。まだお読みになっていない方には、是非手に入れてお読みいただくことをお勧めしたい。それにしても、後々の資料的価値に留意され、幅広く原典などにあたって上で著されていることに感心した。吉村氏は親しい方々に、これが最後の作品になっても良いと語られているようですが、氏の頭の中に蓄積されている膨大な教養をのちの世代に残すためにも、史料的価値のある作品を書き続けて欲しいと切望する次第です。



オーダリー・ヘプバーン VS グレゴリー・ペック